女子大学生の「やりたいこと」と職業決定・職業価値との関連

— 個人志向性・社会志向性との関連から —

梶浦麻琴

(グループホーム五色台)

キーワード: やりたいこと 職業選択 女子大学生

The Relationship between “Yaritaikoto”, Career Decision and Work Values in Female College Students

Makoto KAJIURA

(Group Home Goshikidai)

Key Words: Yaritaikoto, Career decision, female college students

目 的

職業選択は青年期における重要な発達課題である。青年期の職業選択においては、やりたいこと志向が特徴的であるとの指摘があるが、やりたいこと志向をめぐっては、高いキャリア意識であることが考えられる一方、フリーターに特徴的なものであるとの指摘もなされている。このように一口にやりたいこと志向といっても、職業の選択・決定において主体的で意欲的な取り組みに繋がる場合もあるが、たとえ意欲的であってもその取り組みがひとりよがりなものになってしまう可能性も考えられる。そこで筆者は「やりたいこと」が職業選択にどのようにつながるかは個人志向性・社会志向性が介在すると考えた。本研究では女子大学3・4回生を対象に「やりたいこと」と個人志向性・社会志向性がどのように関連し合いながら職業価値観・職業決定につながっているかを検討することを目的とした。

方 法

調査対象者: 4年制女子大学の3・4年次生 144名 (平均年齢 21.14歳、標準偏差 90)。

質問紙の構成:

- (1) 「やりたいこと」についての質問項目: 現時点での「やりたいこと」の有無とその内容について尋ねた。
- (2) 職業・進路決定状況についての質問項目: 若松 (2001) の用いた指標を使用した。
- (3) 職業価値観尺度: 菰田 (2007) が作成した職業価値観尺度の「組織からの独立」の5項目を除き、森永 (1997) の「仕事に関する価値観」の「男女平等」「家族への配慮」のうち5項目を追加した43項目で構成した。
- (4) 個人志向性・社会志向性 PN 尺度: 伊藤 (1994) の30項目を使用した。

結 果

まず、個人志向性・社会志向性 PN 尺度の下位因子得点を z 得点に換算し、クラスタ分析を行った。その結果、2群に分類され、第1クラス (79人) は個人志向性 P および社会志向性 P が高いため、「主体群」、第2クラス (63人) は社会志向性 N が高かったことから「非主体群」と命名された。

次に、学年ごとに、「やりたいこと」の有無と主体群・非主体群を組み合わせた4群によって、職業決定・未決定に差があるか調べるために χ^2 検定を行った。3回生では有意な人数の偏りがみられ ($\chi^2(3)=7.88, p<.05$)、残差分析の結果、やり

たいこと・有・主体群において職業決定している者が多く、職業決定していない者が少ないことが示された。4回生では有意な人数の偏りはみられなかった ($\chi^2(3)=5.68, n.s$)。

さらに、「やりたいこと」の有無と主体群・非主体群を組み合わせた4群を独立変数、職業価値観の各下位尺度を従属変数とした二要因分散分析 (被験者間要因) を行った (Table1)。社会・人とのかわり、群の主効果が1%水準で有意となった (有・主体群、無・主体群、有・非主体群 > 無・非主体群)。プライベートの優先は群の主効果が1%水準で有意であった (無・主体群 > 有・主体群)。自己価値は学年の主効果が5%水準で有意となった (3回生 > 4回生)。また、群についても1%水準で有意であった (有・主体群 > 無・非主体群)。社会的評価は学年の主効果が1%水準で有意となった (3回生 > 4回生)。また、群の主効果についても1%水準で有意となったが、多重比較による差は見られなかった。社会的安定は交互作用が有意であったことから ($F(3,134)=3.00, p<.05$)、単純主効果の検定を行った。その結果、3回生において群の単純主効果が有意であったものの ($F(3,134)=2.74, p<.05$)、多重比較による差はみられなかった。また、有・非主体群において学年の単純主効果が有意であり ($F(1,134)=10.54, p<.01$)、有・非主体群において3回生が4回生よりも高かった。

考 察

「やりたいこと」の有無と個人志向性・社会志向性の関連によって重視する職業価値が異なることが明らかとなった。また、「やりたいこと」があり主体的である場合、3回生では職業決定している者が多いが、4回生では職業決定とは関係していなかったことから、やりたいことがあることが必ずしも実際の職業決定に繋がるとは言い難いと考えられる。

引用文献

- 伊藤美奈子 1994 個人志向性・社会志向性-PN-尺度の臨床診断における有効性の検討 京都大学教育学部紀要, **40**, 269-276.
- 菰田孝行 2007 大学生における職業価値観と職業選択行動との関連 青年心理学研究, **18**, 1-17.
- 森永康子 1997 大卒・短大卒女性の仕事に関する価値観 教育心理学研究, **45**, 166-172.
- 若松養亮 2001 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて: 教員養成学部を学生を対象に 教育心理学研究, **49**, 209-218.

Table1 学年と各群による職業価値観の平均値 (SD) と分散分析結果

	3回生				4回生				主効果		交互作用
	有・主体	有・非主体	無・主体	無・非主体	有・主体	有・非主体	無・主体	無・非主体	学年	群	
社会・人とのかわり	39.40 (5.24)	36.50 (5.98)	37.29 (5.66)	31.29 (5.94)	38.10 (4.83)	34.58 (3.90)	38.10 (8.09)	28.70 (6.45)	1.43	16.15**	.42
プライベートの優先	20.44 (5.60)	21.31 (3.52)	24.21 (2.91)	22.71 (4.50)	20.30 (3.49)	22.00 (3.41)	23.90 (4.48)	20.80 (3.29)	.30	4.32**	.49
自己価値	16.92 (2.29)	15.77 (2.35)	14.86 (2.60)	13.50 (2.29)	15.87 (1.91)	14.67 (1.97)	13.90 (2.08)	13.10 (2.73)	4.53*	13.18**	.16
社会的評価	7.17 (1.37)	8.00 (1.59)	7.57 (1.45)	6.82 (1.47)	6.57 (1.65)	6.67 (1.67)	7.10 (1.85)	5.20 (1.32)	12.68**	4.54**	1.02
社会的安定	5.64 (1.04)	6.69 (1.32)	6.36 (1.15)	5.68 (1.61)	5.57 (1.22)	5.00 (1.35)	6.50 (1.27)	5.80 (1.32)	2.46	2.24	3.00*

* $p<.05$, ** $p<.01$